

	俳句	年代	季節	分類	季語
1	黒雲を起こしてゆくや蒸氣船	18	雑		雑
2	窓あけて顔つきあたる前のやま	18	雑		雑
3	窓あけて鼻の先なり前のやま	18	雑		雑
4	西行の忘れおきしか笠一ツ	19	雑		雑
5	仇波の打てはかへす島邊哉	20	雑		雑
6	海底は照さぬものか朝日影	20	雑		雑
7	起きふしにさはる乳房の重み哉	20	雑		雑
8	ぬれ足で雀のあるく廊下かな	20	雑		雑
9	浅草の鐘の配りし夜風哉	21	雑		雑
10	浅草の鐘より出たる夜風哉	21	雑		雑
11	浅草の塔に向ふもかくされず	21	雑		雑
12	浅草の塔や向ふもかくされず	21	雑		雑
13	仰き見る神の杜より明にけり	21	雑		雑
14	仰き見る神の杜より夜明哉	21	雑		雑
15	仰き見る杜の梢より明にけり	21	雑		雑
16	仰き見る杜の梢より夜明哉	21	雑		雑
17	ありあまる風を分けたし町の家	21	雑		雑
18	言八すして聞くも佛の悟りかな	21	雑		雑
19	浮世とは川一すしのさかい哉	21	雑		雑
20	浮世と八川一すしのあなた哉	21	雑		雑
21	親の顔見る日やいさむ駒のこゑ	21	雑		雑
22	親の顔見る日や駒のいさみかな	21	雑		雑
23	川水の音にゝむ闇夜哉	21	雑		雑
24	鷗飛ひぬありやなしやと見る迄に	21	雑		雑
25	鷗飛やありやなしやと見る迄に	21	雑		雑
26	木のあわひあわひに見ゆる舟三艘	21	雑		雑
27	黒かねの橋の目にたつ白帆かな	21	雑		雑
28	黒かねの橋や目にたつ白帆かな	21	雑		雑
29	こきやめて舟から友の呼にけり	21	雑		雑
30	こゝこせは世は邯鄲の枕はし	21	雑		雑
31	此の風を市に分けたし向島	21	雑		雑
32	静けさや向ふの岸の笑ひ聲	21	雑		雑
33	長命になれや病の出養生	21	雑		雑
34	塵なくて心も水もすみた河	21	雑		雑
35	塵八なし心も水もすみた河	21	雑		雑
36	つく酒のこほれぬ程や舟のゆれ	21	雑		雑
37	出養生われもいのるや長命寺	21	雑		雑
38	土地の名に思ひ出しけり友の顔	21	雑		雑
39	土地の名に思ひ出しけり人の顔	21	雑		雑
40	鳶なくや木の葉もそよと動かぬ日	21	雑		雑
41	寝ころんで見れば小舟の通りけり	21	雑		雑
42	寝ころんでみれば小舟の通りけり	21	雑		雑
43	橋こせは世は邯鄲の枕かな	21	雑		雑
44	橋こせは世八邯鄲や枕はし	21	雑		雑
45	盤梯の火の子の飛ふか星一つ	21	雑		雑
46	一すしの川をへたてゝ浮世哉	21	雑		雑

47	富士といふ名に仰き見つつくり山	21	雑	雑
48	船歌や夢に聞けり閨の中	21	雑	雑
49	船歌や夢に聞つゝ閨の中	21	雑	雑
50	船歌を夢に聞けり閨の中	21	雑	雑
51	船歌を夢に聞つゝ閨の中	21	雑	雑
52	帆をあけてきまればやむや舟のゆれ	21	雑	雑
53	帆をあけてしまへはやみぬ舟のゆれ	21	雑	雑
54	世の塵を水に流して向島	21	雑	雑
55	世の塵を水に流すや向島	21	雑	雑
56	渡りゆけは世八郎鄂の枕かな	21	雑	雑
57	渡りゆけは世は郎鄂や枕はし	21	雑	雑
58	あした行く旅路の夢や草枕	22	雑	雑
59	アメリカの波打ちよする岩ほ哉	22	雑	雑
60	アメリカの波打ちよする濱邊哉	22	雑	雑
61	犬の子がねいるものかや子守歌	22	雑	雑
62	岩ほうつ波も泣いたり怒たり	22	雑	雑
63	浮世をば縮めて見せる芝居かな	22	雑	雑
64	大岩を躍りこえたり波のあし	22	雑	雑
65	くたひれをおさめてしまう枕哉	22	雑	雑
66	雲よりも一段上やつくは山	22	雑	雑
67	さし汐に鷗鳴くなり岸の上	22	雑	雑
68	町内八皆忌服のある娘	22	雑	雑
69	筑波泣く顔や昨日の笑ひ顔	22	雑	雑
70	泣く顔も笑顔も見たり筑波山	22	雑	雑
71	波怒り風鳴き人はほゝ笑顔	22	雑	雑
72	日和にも雨にも見たり筑波山	22	雑	雑
73	二日路は筑波にそふて歩みけり	22	雑	雑
74	松の木の影にあつまる子鯉かな	22	雑	雑
75	三日路をとんで歸るや火の車	22	雑	雑
76	山と水初は自然の文もあり	22	雑	雑
77	世の中の世の中見せる芝居かな	22	雑	雑
78	あゝ三つのいけすに魚の躍りけり	23	雑	雑
79	足利の兵が新田に降参し	23	雑	雑
80	あつもりはうたれて須磨のそばとなり	23	雑	雑
81	あつもりは腰に三本さしており	23	雑	雑
82	あら尊これ月の父花の母	23	雑	雑
83	あると見た色は空なり不二の雪	23	雑	雑
84	安珍の軍艦一ツわたし船	23	雑	雑
85	いつそ皆子供にやれやふしの山	23	雑	雑
86	大釜で民のあぶらがにえあがり	23	雑	雑
87	大釜の中で白波わきあがり	23	雑	雑
88	大湫をきどつて千代が發句よみ	23	雑	雑
89	衣川二十年後のためなみだ	23	雑	雑
90	西行の顔も見えけり富士の山	23	雑	雑
91	西行も笠ぬいで見るふしの山	23	雑	雑
92	十錢の銀を銅貨に両がへて	23	雑	雑
93	寫眞をば眼鏡の箱に入れ見れば	23	雑	雑

94	白鼠わるや祕藏の萬古やき	23	雑	雑
95	月花のつかさや隅田のわたし守	23	雑	雑
96	辻占や女許りの格子さき	23	雑	雑
97	八人のまどゐにかいだ一人かな	23	雑	雑
98	八人のまどゐをかいだ一人かな	23	雑	雑
99	日の本の俳諧見せふふしの山	23	雑	雑
100	ふるさとに心の花をかざりけり	23	雑	雑
101	故郷を立ちいでたるも一むかし	23	雑	雑
102	煩惱の夢の寐さめや富士の雪	23	雑	雑
103	まゝ焚かぬ内の曲突火が消えて	23	雑	雑
104	見あげたる山見下すや九折	23	雑	雑
105	水の音聞てたのもし崖九間	23	雑	雑
106	紫のゆかり尋ねん筆の海	23	雑	雑
107	夢と見た夢も夢なり夢の中	23	雑	雑
108	餘の山は皆うつぶきつふじの山	23	雑	雑
109	龍宮も女さわぎで波がたち	23	雑	雑
110	渡し船佛も衆生もわたしけり	23	雑	雑
111	破茶碗やきつぎしたる聶養子	23	雑	雑
112	つまをよぶ鶴や千歳の松の友	23~24	雑	雑
113	白帆より先づ夜の明る海邊哉	23~25	雑	雑
114	灘の夕日本はふじ許り也	23~25	雑	雑
115	雨の日や殊二こき山うすき山	24	雑	雑
116	雨もよしけつく浮世をかくれ蓑	24	雑	雑
117	一國や巖の上に安房四郡	24	雑	雑
118	岩も皆鋸山や安房の海	24	雑	雑
119	馬の鈴近く聞えてつゝら折	24	雑	雑
120	馬の鈴近くて遠き山路かな	24	雑	雑
121	海と山十七字に八餘りけり	24	雑	雑
122	笠の影小さくなるや原三里	24	雑	雑
123	笠の影の細うなりけり原三里	24	雑	雑
124	鐘つきはさびしがらせたあとさびし	24	雑	雑
125	聞きなれぬ鳥やきこりのなまり聲	24	雑	雑
126	これはしたり厠の窓に竹の影	24	雑	雑
127	しかられる聲は聞えず松の風	24	雑	雑
128	菅笠の影の細さよ原三里	24	雑	雑
129	菅笠や女之助も男にて	24	雑	雑
130	月雪やこれ見るための米のめし	24	雑	雑
131	頭痛する其夜は犬にかまれけり	24	雑	雑
132	七浦や安房を動かす波の音	24	雑	雑
133	腹へこへこ發句吐き出して路遠し	24	雑	雑
134	腹へこへこ發句吐き盡して路遠し	24	雑	雑
135	二見にも似たる岩あり朝日の出	24	雑	雑
136	二日目は發句少し獨りたび	24	雑	雑
137	筆と見て我のみこまん御つるぎ	24	雑	雑
138	筆と見て我ものみたし御つるぎ	24	雑	雑
139	筆なら八我ものみこむつるぎ哉	24	雑	雑
140	筆ならは我ものみたし御つるぎ	24	雑	雑

141	筆にして我のみこまん御つるぎ	24	雑		雑
142	筆にして我ものみたし御つるぎ	24	雑		雑
143	筆にせよ我もにみたき御つるぎ	24	雑		雑
144	ふらはふれ結句浮世をかくれ簀	24	雑		雑
145	ふる事を思ふてうれし馬の鈴	24	雑		雑
146	米點の畫にありさうや蓑の人	24	雑		雑
147	米點の畫に入りさうや蓑の人	24	雑		雑
148	簀笠や馬琴もしらぬ雨の景	24	雑		雑
149	蓑笠や馬琴もしらぬ旅の味	24	雑		雑
150	簀笠や馬琴もしらぬ山の景	24	雑		雑
151	宿帳や生年十九安房めぐり	24	雑		雑
152	世につきぬ眞砂のまちの道樂もの	24	雑		雑
153	世の中を遠目に見るや笠の内	24	雑		雑
154	世をすてし身にたに猶もさわりあり	24	雑		雑
155	我影や廣重流の道中畫	24	雑		雑
156	我なりも昔に似ぬか菅の笠	24	雑		雑
157	我なりも昔に似るか菅の笠	24	雑		雑
158	あし高は家にかくれてふじの山	25	雑		雑
159	安房四郡鋸山の裾野哉	25	雑		雑
160	馬の鈴近くて遠し山の道	25	雑		雑
161	雲いくへふじと裾野の遠きかな	25	雑		雑
162	しかられて車よけるや菅の笠	25	雑		雑
163	菅笠の影八佛に似たりけり	25	雑		雑
164	天と地の支へ柱やふしの山	25	雑		雑
165	灘のくれ日本は富士斗り也	25	雑		雑
166	竝松や一足つゝにふしの形り	25	雑		雑
167	ぬす人の住まうたといふ銀杏哉	25	雑		雑
168	榛名春赤城夏妙義を秋の姿哉	25	雑		雑
169	富士の根を眼當に昇る旭かな	25	雑		雑
170	富士の山雲より下の廣さかな	25	雑		雑
171	筆すててしばし鍬とり給へ君	25	雑		雑
172	間違はし初めて不二を見てさへも	25	雑		雑
173	よぢつめて見れば山なし笠の雲	25	雑		雑
174	笑ふよりあはれ捨子の笑ひ顔	25	雑		雑
175	京人の言葉はしらぬところ哉	26	雑		雑
176	寒し熱しわらはやみこそ新枕	26	雑		雑
177	儒釋道屠蘇酒白酒濁り酒	26	雑		雑
178	月花のどこへころげて樂まん	26	雑		雑
179	見下すや黄雲十里村いくつ	26	雑		雑
180	足揃へ一人落ちたる笑ひかな	27	雑		雑
181	船形の梢短き竝木かな	27	雑		雑
182	薄暮れぬ野末に汽車の走る音	28	雑		雑
183	不二がねや雲絶えず起る八合目	29	雑		雑
184	徽章なき帽は出營の人ならし	30	雑		雑
185	徽章なき帽は出營の人なりし	30	雑		雑
186	君下戸か彌助か菓子か小便か	30	雑		雑
187	入營を親父見送る朝まだき	30	雑		雑

188	御車は涙にかすみ見えざりき	30	雑		雑
189	水の月物かたまるで流れけり	30	雑		雑
190	水の月物からまりて流れけり	30	雑		雑
191	世の中よ鶴は放さぬ人心	30	雑		雑
192	戀にうとき命婦のおもと老にけり	31	雑		雑
193	鷺の立つ中洲の草や川橋	31	雑		雑
194	棧橋に別れを惜む夫婦かな	31	雑		雑
195	もえかぬる竈の薪を組かへて	32	雑		雑
196	歌よみよ我俳諧の奈良茶飯	33	雑		雑
197	山本の小屋を覗けば添水哉	33	雑		雑
198	宿札に假名づけしたるとはれ顔	34	雑		雑
199	相別れてバナ、熟する事三度	35	雑		雑
200	親鳥も頼め子安の觀世音	35	雑		雑
201	鳥の親に中將湯や糞づまり	35	雑		雑
202	天神の戦を習ふ將棊かな	不詳	雑		雑